coin age

[コインエイジ]

no. 108
Summer
2005
夏号

特集

「江戸の快適時間術」

富士電機リテイルシステムズ株式会社

the Front now Special

特別インタビュー

地球の未来、自分の未来を知るための大きなショーケース……それが万博です。

2005年日本国際博覧会
「愛・地球博」広報プロデューサー マリ クリスティーヌさん
インタビュアー 西野七海

多くの思いが形になって表現され、日本と世界を結びつける万博

――広報プロデューサーとしてのお仕事は、具体的にどのようなものなのでしょうか？

マリ　今回は、万博開催の3年前から参加しました。IT時代のエキスポというテーマがありましたからIT技術を使って世界中の方々に万博を紹介するために、ホームページの立ち上げから携わりました。もうひとつ大切だったことは世界中の子供たちに見て欲しいということでした。世界の子供たちに万博を知ってもらうためにはということで、世界中の子供たちに向けて「モリゾー&キッコロ100の世界」絵画コンテストを開催し、海外29ヶ国から3059点を含む、合計4773点の応募がありました。で、それがストーリーブックになっています。

　あとは、とにかく海外に出かけて行っての、万博の紹介でしたね。博覧会事務局（BIE）からの協力もあって、2002年のヨハネスブルク世界環境サミットやスイスの総合博覧会などでプレスの対応などをしました。そのほかにも新聞や雑誌、テレビなどの仕事でも必ず万博の活動の紹介をしてきました。とにかく、草の根的な活動で万博のことを広めてきましたね。閉幕後は海外の王室の方などと

■ マリ クリスティーヌ
父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。この頃スカウトがきっかけで芸能界へ。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学びながら、各種委員会や環境活動など精力的な活動を続ける。主な著書に「自分をいかす人見知る人」（海竜社）、「心地よいわが家を求めて」（TBSブリタニカ）などがある。

一緒に会場を回ったり、取材の対応をしたりということが仕事になっています。

――開幕して半分の期間が経ちますが、これまでの手応えは？

マリ　開幕前は、これほど、良い反応がくるとは思っていなかったんです。万博の大きなテーマである"環境"というのは実は地味なテーマで、熱心な人はすごく熱心だけれど、それを形にする作業はすごく地味なんです。ですから、地味なものを広報していくことは、とても苦労しました。長い説明ができれば良いのですが、万博を一言で説明する言葉がないんですね。ですから、皆さんがこれだけの形にして下さって、来場した多くのお客様が良かったねといって帰って下さることで、多くの思いが伝わったことに満足もしています。海外からの興味、とりわけアジアの国々からのプレスも多くて、驚いています。日本もアジアで生きていくためには、反面教師でなくてはならないと思います。これまでの日本は様々な公害問題があり、環境問題を一つずつ乗り越えて現在に至るわけですから、これから発展していく国が利益ばかりを追求していては、大変な問題になってしまいます。そういった意味でも、今回の万博は良かったなと思っています。

万博の成功というのは、多くの入場者数だけではなくて、2010年の上海万博にどれだけの影響力をもたらすことができるかということも大切だと思います。上海万博は「ベターシティ、ベターライフ」というのがテーマで、開発万博になりますが、今回で開発万博という形が一度立ち止まったわけです。もはや都市というのは、環境を考えなければ成り立たなくなっています。ですから、この万博によって世界が少しずつでも変わっていくなら、私たちの大きな成功なのではないかなと思います。

――アメリカ、ドイツ、タイなどに暮らしてきた経験や、これまでの万博での活動のなかで、諸外国と日本はどのような関係だとお考えですか。

マリ　この万博では、日本を好きになってもらいたいという気持ちがあり、そのために何ができるだろうかということがあります。万博では、先進国は自分たちの予算で参加できます。ですが、発展途上国はと考えたときに、まだまだ整備されていない、産業のない国が参加するのはとても大変なことなんです。ですから博覧会のほうから予算をだして参加してもらうことで、自分たちとの関わりも築いています。アフリカからも34ヶ国が参加していますが、なかにはODAの援助によって参加している国もあります。

彼らにしてみれば、日本という国は、最先端技術があって、近代的でとても素晴らしい国ですが、自分たちが持っている豊かな自然にはかなわないともいいます。自分たちの国に誇りを持っていますし、自分たちの国の環境のなかで暮らしているわけです。だから、国の良さを比べようという気持ちはないですね。海外から来られる方は、日本の先端技術も、四季のある自然も受け入れて、とても豊かであると感じるけれども、それ以上に自分たちの国も知ってもらいたいという気持ちが強くあります。

――多くの国々の方との交流のなかで国際感覚を磨くこつはありますか。

マリ　相手の文化を理解することが大切ですね。挨拶を交わすだけではなくて、自分の国と相手の国の歴史を知ることです。自分自身が国を代表する存在になるわけですし、相手が日本の文化に興味を持ってくれることは嬉しいことですから。万博にくれば、自分の興味のある外国の文化を見つけやすい、ある意味では大きな旅行フェアでもあるんです。国際交流するツールとしては万博はとても役に立つと思います。

未来を感じて、世界を知り環境を考えて欲しい。

――これから会場に来る方におすすめや見所はございますか。

マリ　グローバル・ループは2・6kmありまして、これが世界を結んでいます。これは、私たちにとってもひじょうに大切なシンボルでもあるんです。まず、世界を繋げるということが、愛・地球博の大きなテーマですから、このループを通って地球大交流しているということもありますし、自然の叡智への気持ちを表わしてもいます。地面をずかずかと歩かないで、ループの上を歩くことで、私たちが地球を大切にしていますというシンボルになっています。このループは万博が終われば撤去され、今まで以上の緑を残すということが約束ですから、コンクリートを一切使っていません。

企業パビリオンというのは、企業としての出展ですから、最先端の技術が入っています。そして、それぞれが魅力あふれるものになっています。それと日本館のなかには、ナノバブル水槽というものを展示して、淡水魚のコイと海水魚のタイがひとつの水槽のなかで飼育されていたり、環境にやさしい技術ということで太陽熱と風力、燃料電池、それにメタンガスが混ざった形で日本館のエネルギーを作って

長久手会場にある空中回廊はグローバル・ループと呼ばれ長さ2.6km、幅約21m

■comment

「できれば、何日かかけて会場を見て歩き、諸外国の文化に触れたり、NPOやNGOの活動を見て、21世紀の環境問題にも興味を持っていただければと思います。それと団塊の世代以上の方は、運動靴でいらして下さい。とにかく歩くことになりますから」

・地球博の誕生の地「瀬戸会場」は自然の叡智というテーマを具現化したシンボルゾーン

バッテリー駆動のトラムがループ上を走る

います。これらを見て未来を想像することもできます。

それと、国際交流ということがありますから、手軽に世界旅行をしているような感覚でいろんな国の空気と匂い、文化の香りを楽しめますし、その国が何を一番に誇っているかということを見ることもできますね。もちろん各国の特産品など興味のあるものもたくさん販売していますので、そういう意味では、世界ショッピングもできます。

もう少し深く掘り下げようとするのであれば、瀬戸会場が良いと思います。瀬戸会場は、様々なNPO、NGOが多く参加しており、盆栽から戦争まで幅広いテーマが扱われています。盆栽が私たちにとって、もっとも小さな宇宙だとすれば、戦争は私たちの地球を一番大きく破壊するものなんですね。やはり、平和であることが大事だし、平和だからこそ環境への配慮や対策が生まれます。瀬戸会場ではNPO、NGOの方々が自分たちの思いを形にして行動している会場であり、そのお手伝いをどのようにして行なえば良いかということまで知ることができます。やはりどちらの会場も、リピートして、せめて4～5回は見ていただきたいですね。

――この万博に来場する方には、何を感じてもらいたいとお思いですか？

マリ　この万博で新たな自分の発見をしていただきたいですね。私たちはこれまでの高度経済成長のなかで、次は何、次は何というようにやってきて、ある意味では世界で一番豊かな国なんですね。けれど、世界で一番幸せかというと、そうではない。先日、ブータンの大臣をお連れして案内したんですけれど、ブータンではGNPを追求していないんです。そのかわり、Gross National Happiness（GNH）なんです。自分たちがどんなに先進国であっても、幸せではないでしょう。だから、自分たちは世界一ハッピーでありたい。そのハッピーは社会と経済がなくては成り立ちませんが、どちらを追求するかといえば、ハッピーだというんですね。

ですから今回の万博は、これからやっていきたいことへの目標としてのショーケース、大きなカタログとしてNPO、NGOの活動をご覧になっても良いし、自分が行きたい国への興味を深めても良いと思います。また、最先端技術に触れることで、未来を想像することもできます。そういう様々な意味で、自分を新たに発見していただきたいと思います。

――これから私たちが向かうべき方向を、見て考えることができる存在として万博の意味を再認識しました。本日は、どうもありがとうございました。

西野七海（にしのなみ）
フリーアナウンサー

日本テレビ「ニュースプラス1」テレビ埼玉「週刊谷の国ニュース」全国民放ラジオ101社統一企画事業「アテネオリンピックレポート」等に出演。オフィシャルサイト「NAMI'S ROOM」
http://www2.fcy.3web.ne.jp/~wan/